



東日本大震災の被災と復興における コミュニティ・レジリエンスと外部支援 ——証人の観点からのショートストーリー分析——

村 本 邦 子
(立命館大学)

Community Resilience and External Support for The Great East Japan Earthquake Recovery: Analysis of Short Stories from a Witness' Perspective

MURAMOTO Kuniko
(Ritsumeikan University)

The East Japan Family Support Project is in its eighth year. Using the fieldwork data from the past eight years, the researcher extracted fifty short stories that illuminate the essence of her experience as a witness of the disaster and recovery. The stories illustrate people's source of community resilience and the process of outsider support. The stories from the tsunami affected areas, the nuclear disaster affected areas and the surrounding areas richly describe how people experienced and survived the earthquake. The source of resilience comes from the sense of autonomy and will, as well as people's capacity to "tell the story." Outsiders can support them by fully exerting the capacity to listen and to become story tellers themselves. The people who experienced the earthquake, and the outsiders, all struggle through the fact that they cannot possibly share and understand all that each individual experienced. However, through the act of locating their experiences in more universal contexts, they are able to become the new culture and history themselves.

本研究は、8年間継続してきた「東日本家族応援プロジェクト」によって蓄積されたフィールドノートや素材をもとに、印象に残るショートストーリー50編を書き出し、「被災と復興の証人」として経験してきたものを記述するとともに、被災コミュニティのレジリエンスはどこにあったのか、外部者がそれをどのように支援することができたのかを検証する。結果として、津波被災地、原発事故被害地、周辺地それぞれの物語を引用しながら、被災地の人々が大震災をどのように体験し、生き延びてきたのかを描き出した。レジリエンスの源は自分たちの事は自分たちでやるという主体的決意と「物語る力」にあり、外部者は「聴く力」を発揮することでそれを支え、自らも物語る人になる。当事者も外部者も決してすべてを共有しきれない個を背負ってしがきながら、個を超え普遍的世界に連なっていくことで、新しい文化と歴史が創出されていた。

Key Words : disaster, community resilience, external support, witness, short stories

キーワード：災害，コミュニティ・レジリエンス，外部支援，証人，ショートストーリー

はじめに

筆者らは、東日本大震災を受け、毎年、東北4県にある複数のコミュニティで、「木陰の物語」の家族漫画展をツールにプロジェクトを実施し、被災と復興の証人（witness）になることを目標に掲げて活動を続けてきた。このような設定のもとで被災地の人々と出会い、人々の小さな物語に耳を傾け、そこで発生する共創する物語を通してコミュニティの復興を密かにささやかに応援するという実践の試みだった。本研究では、これまでの取り組みから見えてきたことを振り返り、東日本大震災の被災と復興を記述するとともに、被災地のレジリエンスと外部支援について検討する。

大震災後8年東北に通うなかで、膨大なフィールドノートや素材（写真や音声データ、資料など）が蓄積された。最終的には、これらを被災と復興の多声的物語として編み上げたいと考えているが、今回は、その前段階として、筆者自身がそこから書き出したショートストーリーをもとに、被災と復興の証人として目撃してきたものを描き出してみる。あわせて、被災地の人々が災害をどのように体験し、生き抜いてきたのか、また外部支援者がそれをどのように支援することができたのかを検討したい。

1. エスノグラフィーからショートストーリーへ

1) ショートストーリーとは

Riessman (2014) は、長期間にわたる観察で生み出された文章（エスノグラフィー）は、ナラティブとして編集しうる、いわゆる「テキストについてのテキスト」であり、インタビューの参加者がストーリーを語るように、調査者はデータからストーリーを構築するとしている。最近ではストーリーとナラティブとが区別されないことも増えたが、社会言語学領域において、ストーリーとは、単なるナラティブとしてシーケンスや時間的な順序性をもつだけでなく、通常の出来事のなりゆきにおけるある種の破綻や攪乱、あるいは反発や順応を引き起こす、ある種の予期せぬアクションを含むテキストだという。本研究では、ストーリーとナラティブを厳密に

区別するものではないが、後者の特徴を強調するものとしてストーリーという語を用いている。すなわち、印象深いエピソードとして思い起こされるものについて、発見、驚き、動揺、感動などのリアクションを呼び起こしながら物語は閉じられる。なお、ストーリーと物語は同じ意味で使用する。

2) 研究方法

被災地において、たくさんの物語を聞いた。短いものもあれば、長いものもある。継続的に通い、同じ人、同じ場所を訪れるなかで、物語は書き加えられ複雑化していく。ひとつの物語が別の物語へとつながっていったり、振り返るきっかけと出会うことで、過去の物語が変形したりすることもある。時間経過とともにもつれ合っていく物語を証人として語り出そうとする時、もつれをほどいて一本一本の糸を救い出し、聴き手にわかりやすく編みなおす必要があった。

そこで、フィールドワークで得られた素材をショートストーリー、すなわち、原則的にひとつのストーリーとして境界をもつ形式で整理しなおすことにした。どの程度の長さのものをショートと呼ぶかは、操作的ではあるが、初めに5編のストーリーを書き出し、ストーリーを構成するのに最低限必要と考えられる文字数として600字という枠組みを設定した。400字では少なすぎ、800字では冗長になるくらいがあった。さらに5編のストーリーを書き出し、3名の研究者に読んでもらい、この文字数で良いのではないかと賛同を得た。600字という設定が絶対的な意味を持つわけではない。ここで重要なのは、一定の枠組みのなかでストーリーを語りなおすという手続きである。

フィールドノート、写真や資料などフィールドワークを通じて得られた素材を参照しながら、印象に残る物語を600字以内のショートストーリーという形式で5編、順不同で書き出した。それ以上書き出すことも可能だが、いったん5編という区切りを設けた。2017年9月から2018年8月の間に思いつくものから書き始め、5編書いたところでストップした。それぞれのストーリーには、書き出した順番を示す通し番号とともに、タイトルをつけた。

これを繰り返し読み返し、理論メモとともにグルーピングして構造化した。

倫理的配慮であるが、基本的に「証人になる」と銘打ったフィールドワークによって収集した情報であること、ショートストーリーという性質から個人を特定する詳細な情報は表出しにくいこと、アイデンティティを特定して公開されている資料に基づく記述以外はすべて匿名化したことでカバーされていると考える。個人を特定する可能性のあるものについては地名も匿名化したがる、そうでないものは、土地の特徴がわかるようにそのまま残した。そのうえで、『巨大津波』の証言集に石井（2013）が付記した言葉、「残された記録は多くの個人情報を含みますが、興味本位で読むことは許されません。それこそ一人一人が生きてきた証であり、被災はあくまでも個別の体験だからです。しかし、こうした声に耳を傾けることなしに、未来に向かって進めるとは思われません」を噛みしめたい。

3) 結果

今回書き出された50編のショートストーリーは、その舞台によって、津波被災地、原発事故被害地、周辺地の物語の3つのカテゴリーに分類された。その構成は表1のとおりである。ストーリーの大半は、被災地を舞台とした物語となっているが、被災地と言っても、津波と原発事故とはまったく異なる様相を呈していた。津波被害では、時間経過とともに歴史の循環が見出される構造となっていたが、放射能被害は時間軸が“Before”“After”で区切られ、一方向を向いた矢印で示される。その土地の歴史において、津波被害はこれまでも繰り返し経験され、乗り越えられてきたものであるのに対し、放射能被害は私たちにとって初めての経験であり、いまだ先が見えないという特徴によるものであろう。

グルーピングは小、中、大の3段階で試みていたが、最下位のグループは川喜田（2003）言うところの「離れ猿」が多く不完全なものとなり、50編では少なすぎたのではないかと考え、2段階に留めた。分析ではKJ法を参考にしたが、本来、「離れ猿」を強引に括ってしまうことはその理念に反するため、今回は単にグルーピングという言葉を使用している。紙面

の都合上、すべてを紹介することはできないが、主なストーリーをピックアップすることで、被災と復興の記述としたい。

表1 50編の物語の構成

津波被災地の物語 (30話)	津波がきた (5話) 被災地の子どもたち (4話) こぼれ話 (4話) 中間地帯で (5話) 遠野の役割 (3話) 復興に向かって (4話) 新しい文化の創造 (4話)
原発事故被害地の物語 (14話)	事故以前 (1話) 原発事故が起きて (4話) 命の抵抗 (4話) それでも生きていく (4話) 見えない未来 (1話)
周辺地の物語 (6話)	遠くから思いを寄せる (6話)

2. 津波被災地の物語

1) 津波がきた

印象に残るストーリーとして書き出されたものなかでも、津波の被災体験は強烈なインパクトを持つ。

No.9 園児たちとの避難

「東日本大震災の2日前、大きな地震があったんです」とF先生が語る。市役所に問い合わせ、「いざという時は〇〇小学校に避難します」と保護者にお手紙で伝えてあった。あの日、園には20人の子どもたちがいて、小さい子どもたちをトランクに、大きい子どもたちを机の下に入れ、建物が倒れないよう皆で柱を支えた。たまたま配達に来ていた郵便屋さんと一緒に支えてくれた。

揺れが収まった後、避難を始めた。防災無線がよく聞こえず、状況のみ込めないまま、「いったいどの道を行けば一番良いのだろう」と思案しながら、手をつないで川沿いを歩いた。逆方向を向いてすれ違った人たちもいた。まさかここまで波が来るなんて。そのうち、誰か、たぶん園児がトトロの「散歩」を歌い始め、皆で歌いながら歩いた。その道はいつものお散歩コースだった。

小学校に着いた時にはすでに大勢の人たちが詰め

かけていて、中に入れてもらえなかった。初めて後を振り返ったら、もうそこまで津波が押し寄せていた。「津波だあ！」最後の瞬間は、お腹の大きな先生も両脇に2人の園児を抱え、危機一髪で駆け込んだ。校庭で、園児たちにブルーシートをかぶせて雪をしのいだ。夜には保護者が水をかき分けるようにしてやって来た。「もうダメだと思った」と言いながらも、お手紙を信じて必死に迎えに来たのだ。「このことお話しすると今でも泣いてしまいます」と先生方は涙ぐむ。

No.31 救われた命、救われなかった命

被災地で知り合ったKさん。地震が来た時は仕事の中だったが、家が心配で沿岸へ車を走らせた。家には母と姉がいた。皆が逃げるので道路が渋滞するなか、逆方向はスイスイ走れた。家の前に着くと、2階の途中まで水がきていて、隣家も倒壊していた。「ダメだな」とあきらめかけた時、隣の人が「声が聞こえる！」と言う。音が大きくて聞こえにくかったが、確かに声がする。隣の屋根から家の中を覗いてみると、母が姉の名前を呼びながらバシャバシャ泳いでいた。すぐに飛び込んで引っ張り上げたが、姉は翌日見つかった。家は半壊で、仮設に暮らしている。

働いていた会社は津波で営業停止となり解雇されたので、復興支援の求人に応募し、そこで働いている。自分自身も厳しい条件下で、家族や部下、ボランティアに来た人たちにまで配慮しながら、復興のため静かに仕事をしている。

地震時、Kさんは迷いなく家に車を走らせている。「津波てんでんこ」に反して、Kさんの行動はリスクが高く、状況によっては命を落としていたかもしれない。聞いてはいないが、Kさんの中には、母を救えた安堵だけでなく、姉を救えなかった無念さがあることだろう。解雇されれば、新たな求人に応募して誠実にできることを重ねる。それが、Kさんらしいあり方を支えているようにも思える。

どちらも被災から1年半経ったところで聞いた話である。被災時の体験はどれも壮絶で、心臓が早鐘を打つようなおそろしい話であるが、同時に命の奇

跡を印象づけるものであった。No.9に出てくる「逆方向を向いてすれ違った人たち」は、語る方も聴く方も口に出すことはできないが、ダメだったのではないかと考えずにはいられない。逆にこちらがダメだった可能性もある。私たちは、死者の物語を聴くことはできない。生者の物語を聴くからこそ、支え合い助け合いのなかで生き残った紙一重の命の奇跡に胸を打たれ、その向こうに消えていった命の無念に思いを馳せる。

No.5 被災地の勇士たち

震災当時、Cさんは会社に勤めていたが、消防団で皆の顔を知っているの、自衛隊が印をつけた遺体の身元を明らかにするボランティアをしていた。29歳の娘も一緒に遺体探しを手伝った。「遠くから来てくれた人たちがやっているのに、町の自分たちがやらないのはよくないから、良いことだと思った」。「全国からたくさんの方に来て頂いて、本当に感謝している。そのエネルギーをもらって、私たちが動けた。復興した町を見て頂くことが恩返し」と何度も強調する。Cさんは、復興に身を捧げるべく、仮設住宅から立候補して議員になった。

神戸では、家賃が10倍になった時期から外出もままならず、孤独になったと聞いた。仮設の集会所には鍵がかかり、人が集まれない。それで、仮設に安く朝食を食べられる場所を作ってはどうかと考えている。Cさんのアイディアは、名古屋の喫茶店のように、300円くらいでモーニングを提供するというもの。同席していた80歳を越えるおばさんのアイディアは、わかめのはしっこや大根の皮など、これまで捨ててしまっていたものを薬味に、100円くらいで食べられる「おかゆバー」をオープンしようというもの。朝食を食べに、皆が集まるといい。「住むところがあるだけでもありがたい。お金が少なくても工夫すればできることはたくさんある」と、次々にアイディアが語られる。

遺体探しを手伝った娘も、昨年末、めでたく結婚したそうだ。

これは、2014年になって聞いた話である。消防団の遺体確認はやむを得ないとしても、若い女性が遺

体探しをするというのは胸の痛むことだった。娘のその後が心配だったので、この物語は「昨年末、めでたく結婚したそうだと結ばれている。自分たちのことは自分たちでやるという前提で、遠方からの支援に感謝し、「復興した町を見て頂くことが恩返し」と力を尽くす。80歳を越える女性が高齢者の孤独を防ぐ事業を真剣に考えていることにも感銘を受けた。復興の源は地域住民の自立心である。

外部者が見た光景が2話あるが、どちらも際立って文字数の少ない物語となった。初年度沿岸部で見た光景は、言葉を越える強烈な体感をもたらすものだった。

No.12 ナビが示すゴーストタウン

2011年11月の夕刻、沿岸部の方へ車を走らせてみた。薄暗く寂しい国道を山間、川沿いに走り、沿岸部に出ると、広大な空き地に山のような瓦礫、見るも無残な建物の廃墟、自動車のスクラップ。人家が並んでいたろうと思われるところには、瓦礫の端から片方だけの運動靴やつぶれたカセットテープ、子どものおもちゃがはみ出て散乱している。

今は何もない海辺だが、ナビは、そこが、つい最近まで郵便局や散髪屋やコンビニが並ぶ街だったことを示していた。ちょっと前まで、ここには人々の暮らしがあった。子どもたちが道端で遊び、床屋は髪を切り、郵便局員は窓口に座り、郵便や送金や貯金の仕事をしていたのだろう。あたかも生きた街や人々の姿が眼に浮かぶようだった。海はそんなすべてを持って行ってしまった。あっという間に日が落ちて、辺りは真暗闇になった。

2) 被災地の子どもたち

子どもが守られている物語とそうではない物語がある。地域の人々が助け合う心温まる物語を聴くことが多かったが、時間経過とともに「No.19 子どもがうるさい」のように、排除の物語を聞くようになった。復興とは、否定的要素を含む日常に戻ることもある。

No.8 トレーラーハウスの保育園

2012年秋の夕暮れ、現地の協力者に連れられて、トレーラーハウスの保育園を訪ねた。「園庭もなく、小さなコンテナに20数人の子どもたちがぎゅうぎゅう詰めで、見たら涙が出ますよ」と予告されていた。

到着すると、コンテナ壁面に描かれた大きなパンダが出迎えてくれた。トレーラーハウスと言っても、正面入り口には小さな階段があって、手すりの柵にヘチマの蔓が巻きついている。トントントンと階段を上って中に入ると、そこはまるで秘密基地か隠れ家みたいで、これから何か冒険が始まりそうなワクワク感があった。明るい絵や飾りで囲まれた暖かな空間で、3人の園児たちが折り紙をしながら、穏やかにお迎えを待っていた。

避難して全員無事だったものの、元の保育園は津波で廃園となった。G先生は避難所生活をしながら、途方に暮れる保護者や保育士たちの姿に再開の決意をする。あちこち奔走し、公的施設を借りて、2011年4月1日、保育園をスタートさせたが、約束は半年。どうしても次の物件が見つからず、トレーラーハウスのアイデアを得て、貯金をはたき関東まで購入に行った。被災した当時は怖くて、車があったら実家に帰っていたかも。でも車はなく、全国から駆けつけてくれたボランティアの姿に励まされ、ここまで無我夢中でやってきた。たくさんの人々の支援が心の支えという先生方の社会への信頼は、間違いなく子どもと家族の成長を支えていることだろう。

No.7 仮設住宅の遊び場で

2013年11月、時間まで子どもたちと一緒に過ごそうと、仮設住宅の外のベンチに座って、女の子たちが遊ぶのを見ていた。ボールを蹴ったところで、外からやってきたおじさんがボールを受けて蹴り返そうとした。女の子たちは、「なんで止めんだよ！」と、ものすごい勢いで喰ってかかる。おじさんは困惑顔で行ってしまった。

次にやってきたのはおばさん。「○○さんちはどこだった？犬の○○くんのおうちは？」女の子が「もう出て行きました」と答えると、「家を建てて？そう？よかったわね～。あなたたちも頑張ってるね」と言って、去って行った。いったい何をどう頑張れと

言うのだろう。

そこへ自転車に乗った男の子たちがやってきた。4年生になったら自転車に乗っていいそうだ。女の子たちは、「あいつら、うちに来て、水くれ水くれうるさい」と憎々しげに男の子たちの悪口を言い合った。

ドッチボールを始めると、ボールが花壇にあたり、おばあさんに怒られる。「あれじゃあ、子どもに遊ぶなって言うようなもんだろ！」と女の子たちは憤慨する。聞くと、近くに遊び場はなく、走って30分の学校の校庭か、もっと遠い公園に行くしかないそうだ。

だんだん寒くなってきたので、女の子たちは集会所に入り、ゲームを始めた。仮設の子、別の場所で被災し引っ越してきた新しい家の子、地元の家の子が混じっているらしい。それでも仲間内の結束は強く、けんかもいじわるも一切ないように見えた。

No.7は、今なお仮設住宅に残らざるを得ない家族のなかで、さまざまな葛藤や怒りを抱え込んでいる女の子たちの物語である。それぞれ家族も事情を抱えていることだろう。復興の格差が言われ始めた頃だった。女の子たちの家の状況にも格差があるはずだったが、排除や諍いはなく、外部の悪意から自分たちを守るために身を寄せ合っているように感じられた。大人たちの守りが薄くなると、子どもたちは自分たちで身を守るのだ。どうにもやるせなかったが、そこに子どもたちの自負や力を見ることもできる。

No.33 子どもに歴史を見せる

N市は直接、津波の影響は受けておらず、震災後も変わらない生活を送っているように見えるが、実は父親が被災地に派遣されて不在となって、余震が続くなか心細い日々を送った家族が多かったと聞いていた。

子育て中のママたちと話す機会があった。都心部の子育てと違い、まだ地域や大家族制が生きていることを感じさせられたが、やはり震災の話が多く出た。被害の大きかったH市は、休日に家族でよく遊びに行く場所であり、親戚や知人がいるという人が

多かった。震災後3日間停電が続いた後、ようやくついたテレビのあまりの惨状に、ショックで泣いたと言う女性たちがいた。彼女たちは、「歴史に残る大きな出来事だから、この光景を見せておかねばなるまい」と、後日、子どもをH市まで連れて行った。陸に上がった船やすざまじい破壊に、テレビではバーチャルなものと感じていた子どもも絶句していたという。

後日この話をしたら、複数の人から「わざわざ子どもにトラウマを与えるのはどうなのか」と批判的コメントが返ってきた。そうだろうか。あるがままの現実子どもと共に向き合うという姿勢は、なんとも恰好良いではないか。批判は、未来の津波を想定しない人たちの発想かもしれない。

3) こぼれ話

こぼれ話のうち3話は奇跡にまつわるものだった。それらを偶然と説明することはできるだろうが、生死を分かち領域に属する物語は、すべてが意味づけられ、奇跡のように感じられる。被災地で多く聞かれた幽霊話もその一環だろう。それらは物語化の大きな原動力となり、人々の心を活性化する。

No.3 風の電話

2014年秋10月、「風の電話」を訪れた。早期退職したBさんは、1700坪あるという地に、一人こつこつ庭を創り続けてきた。海を望むその美しい庭に、白い電話ボックスが立っている。中には線の切れた黒電話があって、亡き人たちと心で話せるのだという。震災以後、すっかり有名になって、噂を聞きつけた遺族やボランティアが多く訪れていた。

「誰と話そう？」一瞬迷ったが、遠くに青く輝く海を眺め、東北に十年通う縁を得た者として、海の向こうに逝ってしまった方々のことを思いながら受話器を取った。周囲の草花がサワサワとざわめき始めたかと思うと、電話ボックスがカタカタ音を立て、足元から揺れ始めた。ほんの一瞬ひるんだが、静かに耳を傾け続けようと腹を括った。何かが聴こえたわけではない。ただ、数知れぬたくさんの見えない命に満ちた空間に、ふと抱かれたような気がした。3分ほど揺れていたのだろうか。やがてカタカタい

う音はやみ、静寂が戻った。小さな地震だったらしい。

「汽水域」という言葉がふと浮かんだ。きっと、ここは、あの世とこの世が混じり合う汽水域となっていて、「風の電話」はそのシンボルなのだ。東北には、あちこちに、あの世とこの世が重なる時空間がある。被災地では、新たに多くの怪談が生まれ、語られているとも聞いた。私たちは、死者たちやこれから結ばれていくだろう命と出会い、つながりながら、残るひとときを生かされていくのだろう。

4) 中間地帯で

中間地帯とは、被災地であっても、内陸部だったり小高い丘になっていたり、そこ自体は直接大きな被害を受けておらず、被災地と非被災地をつなぐ中間地点として機能したところのことである。

No.11 まぶだちが流された

2012年秋、約束までの1時間足らずに夕飯を済ませることにして、近くの店を紹介してもらおう。すぐできるお勧め料理を注文して食べていると、店長が「ボランティアですか？」と尋ねる。簡単にプロジェクトのことを話す。約束の場所まで歩いて5分もかからないのに、店長自ら車で送ってくれるという。そして、そのほんの数分のうちに語り出した。「私、生まれがS市でしてね。子どもの頃からのまぶだち（友達）が流されて、上がらないんです。この歳になるまで、あんなに泣いたことはありませんでした。それから去年の暮れにね、S市役所に勤めてたもうひとりのまぶだちが、くも膜下出血で死にました。出張先でね。忙しかったんだと思います」。あっという間に目的地に着き、お礼を言って別れた。

きっと誰かに話したかったんだろう。二度と会わないだろう外部の人間、しかも、話すだけ話したら、さっと立ち去ることのできる限られたわずかな時間のなかでしか話せなかったのだろう。東北を訪ねると、こういうことが時々起こる。

中間地帯には、被災地に縁があって心理的には大きく被災しているが、そうではない周囲の人々との間に溝を抱える人々がいた。また、中間地帯は緊急

時の支援拠点となり、さまざまなボランティアセンターができていた。その代表が遠野である。遠野は内陸と沿岸の中間地点に位置し、宮古、大槌、釜石、大船渡、陸全高田などの被災地が半径50キロ圏内にあることから、岩手県沿岸部の支援の拠点となっていた。

No.24 混乱時のボランティアセンター

沿岸部が壊滅状態だった岩手では、遠野がボランティア受け入れ地となっていた。遠野は、内陸部と沿岸部の各都市を結ぶハブとして、災害があれば後方支援をする文化的土壌があった。ライフラインも通常どおりで、沿岸部各地まで日帰り可能であることから、全国のボランティアを受け入れる中継地となっていた。そこに、ボランティアをコーディネートする団体があった。

そこでボランティアをした友人によれば、毎晩7時に誰でも参加可能な会議があって、その場で需要と供給のマッチングができれば、すぐ活動開始となる仕組みになっている。とても民主的で上下関係がほとんどなく、誰が何をやってもよい。全国からボランティアが入れ替り立ち替わりやってきて、2週間もいれば長期ボランティア、3ヶ月だと完全に内部スタッフとして、どんどん大事な任務を任せられ、経験の浅い若い人たちも重要なプロジェクトリーダーをやっているという。

組織としてどうなっていて、誰に話をすればよいのかよくわからず、とにかく行ってみるしかない、前夜に電話を入れ、責任者という人にアポを取った。約束の時間に訪ねると、誰もその人の名前を知らなかった。その時その場のリーダー的な人が対応してくれたが、十年のプロジェクトだと言ったら、「1週間後のこともわからないのに、十年後なんて」とあきれられた。たしかに翌日の約束も成り立たないのだ。被災後半年経ってもここはまだ緊急時であることを痛感させられた。

柔軟性と機動力で活躍したセンターは、「No.25 ゲリラ的ボランティア」が示すように、自己申告制で即座にマッチングする方式を取っていたので、カルトやマルチ商法が入り込んだことも後々明らかに

なった。大きな災害は無政府状態の持つエネルギーを引き出し、それが全国のボランティアを鼓舞してもいた。

5) 遠野の役割

遠野は、歴史的に、津波の多いこの地域の中間地点であったために、伝統的に後方支援の文化を構築していた。

No.36 記憶のバックアップとしての遠野

震災の年に偶然聞いた遠野物語第99話、福二という男が津波で流された妻の幻をみる話は、強烈な印象を残した。数ヶ月後、たまたま福二の子孫という男性がテレビに出ていた。彼は、母親からこの話を聞き、「先祖の話だからしっかり読んでおきなさい」と言われたが、なぜ自分の親族だけがこんなふうに恥をさらさなければならぬのかと反発心を持った。しかし、今回の津波でその母親を失い、これを語り継がなければならぬのだと思ったという。

それから3年後、遠野の学芸員から聞いた話だ。この男性は、2012年1月、情報を求めて博物館にやってきました。津波で自宅を流され、家系図や親戚関係の記録も失ってしまったので、自分のルーツを復元しようと遠野の親戚を訪ね、聞き取りをしていた。たまたま関係者を知っていたので紹介し、その後もやりとりしているようだ。

学芸員にとって、これは遠野の歴史的な役割を再認識する機会だった。遠野という土地は死者への想いを長く抱え続けていける場所であり、自分達の土地の記憶だけでなく、周辺地域の記憶をバックアップする役割も担っている。遠野に伝えられている文化は、過去の戦争や災害、飢饉など歴史を経て積み上げてきたコンテンツである。今回の震災もこれまでの歴史の延長線にある。大きな被害を受けても本質的な部分は変わらないという不変性の凄さをあらためて実感しているようだ。

6) 復興に向かって

1年に1度、定期的に訪れる外部者だからこそ見える変化がある。壊滅した鉄道や道路が復旧したり、

新しくなったりというのもそのひとつである。三陸鉄道は、「No.28 復興のシンボル三陸鉄道」にあるように、早い時期から現地の人々に希望を与えていた。しかし、復興は違うものをもたらす。

No.29 三陸鉄道に乗って

2015年秋、公共交通機関を使って沿岸部を旅してみることにした。一関経由で気仙沼へ行き、BRTを使って盛へ。BRTとは震災で運休となったJR線のバスサービスで、気仙沼と盛をつなぐ大船渡線の線路敷をバスが走る。途中一般道を走る部分もあるが、線路内を走っている時には、自分の乗るバスが遮断機の中にいる格好で、時々混乱する。バスの終点は盛駅の1番ホーム。その夜は、新しくできた大船渡温泉に1泊し、翌朝、三陸鉄道南リアス線に乗り込む。ずっと乗ってみたかったのだ。

釜石まで9つの駅があって1時間弱。お天気も良く、車窓から青い空と海が交じり合う美しい風景を眺めることができる。駅ごとの個性的なしつらいがまた楽しい。恋し浜駅には、ホタテの貝殻でできた絵馬が待合室の窓にびっしりと飾ってあるし、三陸駅には干し柿が暖簾のようにつるされている。平田駅から大観音を臨むと、もう終点の釜石だ。

釜石・宮古間をつなぐJR山田線は復旧のめどが立たず、バスを乗り継いで宮古へ。宮古からはまた三陸鉄道の北リアス線が走っているのだから、終点の久慈まで乗る。16駅あって、こちらは1時間半ほど。2両編成の小さな列車だが、あまちゃんブームでにぎわっている。

赤や黄色に色づいた山々と輝く海の美しさに始終ワクワクしながらも、実は、南から北まで海沿いに延々と防波堤の工事が始まっていることが気にかかっている。これからはこんなふうに海がブロックされていくのだろうか。

7) 新しい文化の創造

この項目には3話あるが、いずれも語り部に関わるものである。早いところでは1年目から活動が始まり、複数地点を繰り返し訪れてきた。時間経過とともに語り部の口調や物語は変化していく。年月が経つにつれ、語りは安定しパターン化していくのだ

ろうか。

No.45 語り部の被災体験

「学ぶ防災」に毎年参加している。2015年秋のガイドさんは被災経験を持つ女性だった。家を流され、義母を亡くした。自分は仕事で、津波でんでこで高台へ逃げた。でんでこは、子孫を絶やさないため、家族の絆を信じてそれぞれ逃げるということ。家に戻っていたらと思うこともあるが、夫とその話はできない。でも、今は、逃げてよかったと思うことにしている。その分、防災を訴え続ける覚悟だ。

義父は漁師だった。船を失い、仮設でテレビを見るだけの生活となり、これではと、夫と相談して家を買うことにしたが、引っ越す前に亡くなってしまった。2011年暮れのことである。義父は戦争と昭和の津波を体験し、お酒が入るといつもその話をした。「またか」という感じで聞いていたが、今はそのことを後悔し、どんなに皆から煙たがられても防災を訴え続けようと思っている。

「最近になってようやく自分の体験したことを話せるようになりました」「繰り返し、繰り返し、たとえ飽きられても語り続けたいと思っています。それが亡くなった方への弔いになると思うから」との言葉を振り返り、聞きすぎはしなかったか、彼女は話しすぎはしなかったかと後で気になった。翌年の「学ぶ防災」で再会した彼女ははつらつとして見えたが、ご自身の体験は口にされなかった。

個別対応の語り部が被災体験を口にする時、どこまで聞いていいのかわからず躊躇する。もしかすると、職業柄つい聞きすぎて、本人が語ろうと思う以上のことを引き出すこともあるのではないかと考えさせられる経験だった。語り部たちは、さまざまな客を相手にしながら、試行錯誤して自分の語りを作っていくのだろう。毎回、聞き手と人間的に出会いながら語るのでは疲れ果ててしまう。しかし、一方的な発信だけでは孤独である。平和の語り部たちが、語る苦痛から逃れるために薬を飲んで仕事をするという話を聞いたことがある。語り継ぐ意志を受留めつつ、どこまで聴くか、背負うのかという聞き手の主体的決断が求められるのかもしれない。

No.34 Y町復興の証人として

2018年3月、Y町で開かれたY民話の会発足20周年の会に参加した。リーダーのLさんは、自宅で津波に遭い、家ごと漂流した体験を持つ。会員のお一人は犠牲となり、家族を亡くされた方もいる。2011年5月、避難でバラバラになった会員6名が集まり、津波体験を語り合い、語り継ぐことの重要性を再確認し、町民の震災体験の聞き取りを始めた。これは巨大津波の証言集として出版された。

N小学校の子ども神楽が披露された後、町民6名が収録された自分の体験を朗読した。壮絶な体験を淡々と読みあげるが、「夫の声を聴いたのはこれが最後になりました」と結ぶ声のかすかな震えや小さな抑揚が聴く者の身体に響く。200人近く集まった聴衆が耳を澄まし、一体化していった。その後、各地の民話の会が地元の民話を語ったが、どんな民話にも根っこがある、しっかり語らなければならないという。翌日は、津波に襲われ、屋上の倉庫に避難して全員助かったS小学校を描いた紙芝居があった。S小学校はN小学校に統合され、きのうの子ども神楽にS地区のものが統合されていたことを知る。

最後、フロアから地元NPOの男性が遠慮がちに立ち上がり、民話の会に寄付への謝意を表した。証言集の印税から経費を引いた残りだったと事もなげな返事だった。こんなふうには、町は苦難を乗り越え共に復興していくのだ。その跡に、新たな文化が創造されていく。

この時ほど復興の目撃者として存在したと感ずることはなかった。大津波の体験を語り継ごうとする意志を町全体が共有し、それを応援する外部の人々の動きと結びつき大きなうねりとなっていた。その結実として出版や記念碑があり、新しい神楽も生まれていた。

3. 原発事故被害地の物語

1) 原発事故が起きて

津波被災には喜びも悲しみもたくさんの物語があった。原発事故では、情報の隠蔽、不適切な避難指示、被害状況も安全性もすべてが曖昧模糊として

おり、何を信じていいのか、これからどうなっていくのかまったく先が見えないなか、人々は心身を固くして何とか精いっぱい生きていた。

No.41 大人が見守るなかで

被災から9ヶ月経過したが、Z市は放射能の問題を抱え、事態は改善していくものとは違う事情を抱える。チェルノブイリについて書かれた論文によれば、住民のストレスは、強制避難によるコミュニティの絆の破壊、安全基準の混乱、医者や知的階層の移出、生活変化（子どもたちの生活圏、遊び場、食物の制限など）、食物の安全性の不確かさからきており、人々の反応は信頼感の喪失と不信感の蔓延、不安、抑うつだという。

遊びワークショップには20名ほどの子どもたちが来てくれたが、保護者の数の方が多く50人を超えた。Z市内の家族の多くは週末ごとに県外へ出て、子どもたちを外で遊ばせる。市内に安全な公園があっても、ホットスポットが散在しているので、子どもだけで外に出せない。だから、親たちは無料の室内の遊び場情報に敏感なのだそうだ。

両親や祖父母がずらっと周りを取り囲み、我が子から片時も目を離すことなく見守るなか、子どもたちは一人残らずお行儀よく、それでも楽しそうに遊んだ。通常なら、悪ふざけして走り回る子どもが1人か2人はいるだろう。緊迫した状況にあるからこそ家族の一体感が高まり、子どもたちは抑制されている。大人の暖かな眼差しに守られていることは喜ばしいことだが、子どもの成長には、大人の眼を盗んで悪さすることもまた必要なのだ。この子たちは、これからもこんなふう成長していくのだろうか。

No.2 王様の耳はロバの耳

2011年12月、日々悩みながら懸命にお仕事をされている支援者たちが集まっていた。ある保育園の園長の話である。

子どもから「先生、ボク、ヒバク？」と聞かれて答えに詰まり、保護者から「本当に大丈夫なんでしょうか？」と尋ねられて、「安全基準ですから、大丈夫ですよ」と答える。本当のところ、確信なんて持

てない。関東から施設の線量を測りに来た専門家たちは、宇宙服のように仰々しい恰好で仕事を済ませ、「早く帰って体を洗い流さない」と笑いながら言う傍ら、普段着にエプロンをつけただけの自分たちに向かって、「基準内ですから大丈夫です」と宣った。毎日、子どもや保護者の前では笑顔で対応し、陰で泣くしかない。心の中には黒い思いが渦巻いているが、おいそれと不用意な発言はできない。吐き出すところがなくて、「王様の耳はロバの耳」みたいに、穴を掘って叫びたい。

あたり一面、鬱屈した空気に満ちていた。その気分は関西から行った私たちにも伝染し、まるで抜け道のない真っ暗な穴倉に閉じ込められているようだった。そこは、まさに「王様の耳はロバの耳」の穴の中だった。

大人は子どもを、支援者は被支援者を必死に守ろうとしていた。守る者があることで何とか立っているが、その自分たちを守るはずの大きなものは信じられない。リスクをどう判断するかは、限られた条件下、個別に選択しなければならない。家族であっても判断の基準に違いがあるため、食べ物やライフスタイルを共にする関係に葛藤が生じる。

No.1 Aさんの干し柿

抜け道のない鬱屈した空気の中、私たちは、何とかこれまでの日常と現在との連続性を見出せないかとあがいていた。そんな時、毎年2千個の干柿を作って、友人知人に配ってきたというAさんが、来週の検査で安全基準だったら今年も作るのだと話してくれた。眼前にぱあっと、青空を背景にたくさんの干柿が吊るされているのどかな光景が浮かんだ。「検査がうまくいって、今年も干し柿作れたらいいですね」と言うと、「できたら少し送りますよ」と言ってくださった。

「どうか無事に干し柿ができますように」と祈り続けていたら、年明け、大学に小さなダンボール箱が届いた。嬉しかった。Aさんの干し柿は、甘くとろける柔らかな柿で、これまで食べたこともないおいしさだった。希望者にお裾分けして、みなで楽しんだ。

この話には、誰にも言えない懺悔が続く。うちには放射能に敏感な家族がいて、関西にいても、それは食卓を分かち話題だったから、干し柿を家に持ち帰ることはできなかった。残った分を研究室に置いて帰り、プロジェクトメンバーに分けようと週明けに行ってみると、すでに傷んでしまっていた。本当に申し訳なくて心苦しく、喜びだけを書いたお礼状を書いた。Aさんは福島の水を飲み続けているが、他の家族は飲まないし、干し柿も食べないと言っていた。山で水を浄化するシステムが作れないか研究中だそうだ。

No.49 私の物語は私のもの

漫画展の感想ノートへのメッセージはいつもそれほど多くないが、初年度のZ市のメッセージには特別な手応えがあった。

- ・あたたかい話、ほっとさせられます。自分の歴史を振り返させられます。
- ・真に人の歴史ありですね。なにげない人生のように見えても人それぞれ喜びもあり悲しみもある。「戦い」の最中にある時はなぜ? どうして? と何かをうらみたいなる事もあるでしょう。でも、振り返ってみれば逆境にあったからこそ得たものの大きさ、重さもあります。このたびの悲劇もきっとそうなる時が来ると信じます。
- ・何が良かったか、何が悪かったかはその人自身しか決められないし感じる事ができない。そういうことを少しでも安心しながら考えることができたらいいなと思いました。
- ・誰も正しい答えをもっていない、答えがわかりづらい時代の中で、家族や自分を考え、見つめ直すよい時間を頂けました。
- ・日々の何気ない出来事の中にも人生の一步が刻まれる。負けずに一步、前へ進まなくてはならない。
- ・明日も頑張ろう。楽しい人生に向って。
- ・死を迎えるその時、あーあ私の人生は楽しかったと云える様に。

この時期、Z市の人々は、目に見えない大きな破局に呑み込まれ、私の物語を見失い、身動きが取れなくなっていたのだと思う。漫画展が自分の物語は自分にしか描けないことを思い起こし、何かが動き

出すきっかけになったのだとしたら嬉しい。

後々、「誰も何も教えてくれなかったから、私たちは、最終的に一人一人自分で決めて、自分で動かなければならなかった」という言葉を聞いた。結局のところ、自分の人生は自分のものであり、自分で背負っていくしかない。

2) 命の抵抗

国の避難指示に反して、避難指示地域に留まった人たちがいた。重い認知症の高齢者を抱える家族だったり、家畜やペットなど命を預かる人々だった。避難指示区域は基本的に無人地帯である。

No.21 Kさんの人命救助

原発事故から2週間ほど経った時のこと、馬の世話をするために唯一人避難区域に残ったKさんは、一人の女性が氷の上で血だらけになって気を失っている場面に遭遇した。予定日を1週間後に控えた妊婦で、「意地悪ばあ」の言いつけで、避難先から家族の着替えを取りに戻っていたのだ。誰もいない、救急車もないなか、すでに冷たくなっていたその人を、Kさんは自分の車に乗せ病院に向かったが、車の中で赤ちゃんが生まれてしまった。牛馬の出産には慣れてはいたが、人間は初めてで、臍の緒を切った時には手が震えたという。

途中、スピード違反でパトカーに止められ、事情を話すとパトカーに乗せてくれた。雪山の遭難と同じで眠るとだめだと言うので、叩いて起こすが、ちょっと眼を開けて、「この子だけは助けて」とつぶやいて眠ってしまう。「いったいこの子を誰が育てるんだ!」と必死に呼びかけ続けた。母子ともに助かり、今は子どもも大きくなって、人一倍元気に、そこら中跳ね回っているそうだ。

雪が降るなか、予定日間近のお嫁さんを一人避難地区にやるなんてとあきれつつ、たまたまそこを通りかかったのが、年間60頭もの馬や牛のお産をしてきたKさんで本当に良かったと胸をなでおろした。

No.17 希望の牧場

2015年夏、関心を持っていた「希望の牧場」を訪れた。牧場主Iさんは、第一原発から14kmの牧場に留まって、330頭の牛の世話を続けている人だ。彼のことは、断片的に登場するドキュメンタリー映画や本などで知っていた。衝撃的だったのは、一家は満蒙開拓団として中国に入植したが、関東軍に捨て置かれ、父は自分の母と子どもたちを自分の手で殺めたというエピソードだ。父はシベリアに抑留され、3年後に帰ってきた。すべてを失った父は一から原野を開墾し、ようやく手に入れた山林の一部が希望の牧場だという。Iさんは戦後に生まれ、その話をずいぶん経ってから母親に聞いた。

自衛隊が命を懸けて事故への対応をしているとき、原発を作った東電は逃げた。国は、被曝して商品価値がなくなった家畜を殺処分するという方針を出した。仲間たちは泣く泣く同意するしかなかった。すべては原発のせいだ。誰も責められない。でも、自分は皆と真逆に行く。牧場の建物には、スプレーで書かれた「2011年3月12日P町無念」「原発一揆」「治外法権」「決死救命、団結！」の文字が並ぶ。これらの文字の向こうに、Iさんのどれほどの思いがあることか。

避難解除されていないP側のブロックされたゲート前では、線量計が「 $0.53\mu\text{Sv/h}$ 」を示した。文字通り「決死」である。大きな流れに逆らって、真逆に行くとした人の源には、戦中から連綿と続いてきた強者優先の論理、国の棄民政策への命の抵抗があった。

3) それでも生きていく

そんななかでも、困難に立ち向かい地域再生のために力を尽くしている人々がいる。

No.18 あらふどこぐ人たち

福島県の土湯温泉にある「元気アップつちゆ」は、震災の翌年、地域の街づくりのために同士が集まって立ち上げた組織だ。地熱を利用したバイナリー発電や水力発電など再生エネルギーに取り組んでいる。代表Jさんの話を聞いた。

土湯も被災し、16軒あった旅館のうち7軒が休業した。「土湯はどうなってしまおうだろう」と

暗澹たる気持ちになった。初め体育館に千人ぐらいが避難してきて、二次避難で残った9軒の旅館が避難者を受け入れた。多いときは800人ほど。土湯の小学校には子どもが12人しかいなかったが、避難者は家族連れで、温泉街に子どもたちの声が響き渡り、それだけでも気持ちが安らいだ。ところが、三次避難で、8月末をもってみんな温泉街からいなくなり、土湯はまたもぬけの殻になった。一段と危機感が募り、何とか土湯を再生させなければと、有志で組織を作った。有志とは、オイルショックの時代、土湯温泉を盛り立てるために結集した当時の青年団で、「あらふどの会」という。この地域では、積もった雪をかき分け道を作ることを「あらふどこぐ」と言うのだそうだ。

響き渡る子どもたちの声に気持ちを和ませた人たちの思いに胸が熱くなる。津波被害で壊滅した保育園を立て直そうと頑張っているところに、子どもの声がうるさいとクレームがあった話を思い出したのだ。自分たちの街を次世代につなぐために再結集して「こがれるあらふど」に続く人たちが増えることを。

4) 見えない未来

チェルノブイリはあるものの、私たちにとって、今回の事故は初めての経験である。時間経過とともに見えてくるのは、人間の想像をはるかに超えた世界である。これから先もどんなことが起こるのか、誰にも予測できない。

No.47 巨大化した動物が闊歩する町

避難解除がなされた町を巨大化した動物が闊歩しているという。2017年夏、原発20キロ圏内の町を訪ねた。現地には、避難指示区域のなかで動物たちの世話をしてきた人々がいた。話を聞いてみると、人が住まなくなつて6年、そこら中が野生の王国になったというだけの話ではないらしい。

避難指示が出てから、飼い主たちは泣く泣くペットを置いて避難した。そこに動物愛護団体が入り込んだ。犬猫がかわいそうだと、警備員の眼を盗んでは禁止区域に入り、大量のペットフードを持ち込んだ。開いている家、地震でガラスが割れた家の中に

餌を投げ入れていた。それらの餌を、アライグマ、猪、ハクビシンが食べた。かわいそうだからと猪に餌をやった者もいた。ペットフードは栄養価が高く、動物たちは巨大化し、繁殖した。しっぽまで丸々太って二倍ほどあるハクビシンが家に住みつき、8匹、10匹と子どもを連れた猪が、除染作業をしている田んぼの横を歩いて通る。野生と人の境界がなくなり、かつての棲み分けもなくなった。

そこに人が帰ろうとしている。動物に荒らされひどく臭い家に戻りたくない、何とかきれいに修復して暮らし始めても、動物たちはやってくる。捕獲を試みても、すぐ罠にかからなくなった。結局、家の周りに柵を作るしかない。これでは、人間の方が檻の中に閉じ込められているようなものだ。動物たちに罪はない。生態系を乱したのは人だ。

4. 周辺の地で

被災地ではないところにも、心理的被災者とでもいべき人々がいる。被災地の出身だったり、家族や知人が住んでいたり、深い思い出があったり、ボランティアなど被災を契機に被災地と縁ができた人々である。周囲の人々の意識とは格差があるため、孤独である。

No.22 故郷を遠く離れて

2015年3月、縁あってNYにある東北県人会の追悼式に参加した。この時期、NYでは複数の震災追悼式典が開催され、いずれもたくさんの方が集まるという。これには正直驚いた。関西より盛大と言える。そして、2011年3月を思い出した。

震災が起きた翌日、私はNYに飛び、イエール大学を訪問した。先生方は涙を浮かべ、口々にお見舞いの言葉をかけてくれた。日本では関西と東北は遠いが、小さな島国をひとたび遠く離れてしまえば、距離などないに等しい。あたかも被災者であるかのように扱われることに面食らいながらも、なぜか感謝を表明する役割を取るようになった。被害状況を十分に理解できないまま旅立ったが、あちこちで衝撃的な映像の断片が眼に飛び込んでくる。日に日に、そんな大変な状態にある「祖国」を捨て置いて、こ

んなところで仕事をしている場合かと罪悪感に苛まれ始めた。その後、西海岸へ飛び、協定校を訪れると、日本人留学生たちが大変な状態なので、セルフヘルプグループを立ち上げるという。日本の惨状が報じられてから一週間、ほとんど飲まず食わずの状態です。テレビにかじりついていました。

国を離れ遠くにいればいるほど、故郷の惨状に胸を痛め、その思いを誰かと分かち合いたいと思うものなのかもしれない。式典では豊作や大漁を祝う東北の歌や踊りも披露されたが、ポロポロ涙を流しながら踊る人たちの姿があった。

No.38 ボランティアに参加した無名の人々

「2011年3月11日、私は大学4年生で、卒業式を控えていました。この震災で卒業式は中止、私はすぐに災害ボランティアの一員として8月まで活動しました。初めて現地に入ったとき、いつものまったりとした景色は消え失せ、この世の地獄のような惨状でした。このなかには、夫を亡くした人、逆に旦那さん以外、全員亡くなった人、子どもを亡くした人、さまざまな話を耳にし、毎日現場に入って話を聞かされたときに涙していたのを思い出します。震災から2年、今も心を病み、悲しみに暮れる家族がたくさんいます。どうかこれからも活動を続けてください。きっと救われる人たちがいるはずですよ」。

2013年夏、漫画展に偶然出会ったという20代男性の声が残されていた。あの時、全国からどれだけ多くの方がボランティアに駆けつけたことだろうか。「この世の地獄のような惨状」を眼にし、時間が経過して、直接的な被災地以外にも、物言わぬまま密かにこういう世界を抱えている無名の人たちがたくさんいるだろうことに思いを馳せた。少しずつ報道が減り、世間の記憶が遠くなりつつあるところで、彼は忘れられない光景を一人抱えていたのだろう。直接会ったり話したりしたわけでもなく、偶然私たちの活動を眼にして、被災地に思いを寄せる同士を感じたのだろうか。「十年続けています」という看板がもたらすつながりの感覚を実感する経験だった。

5. 被災と復興の物語を語ること、 レジリエンスと外部支援

1) 被災と復興の物語を語ること

ストーリーは、書き手が主人公のものもあるが、その多くが被災地の他者を主人公とし、聞き語りの形を取っている。被災の物語は、プログラム内外で語られた。被災体験を不要に引き出さないよう、十分な配慮をしてプログラムを組んだが、おそらくは、証人になるという目標を掲げ、臨床心理や対人援助を専門とする私たちに対する自己紹介として、被災時の体験が語り出された。あるいは、そのように枠づけられた活動のなかで、あふれ出るように語り出された。その様子を見た現地の主催者たちは、「自分たち同士で話し合えたのがよかった。私たちはまだ被災体験を十分に話せていないんです」「同僚や友人の被災体験を初めて知った」と言った。

被災時の体験は、外部者に話すこと以上に、外部者の存在を媒介にして仲間同士で体験を共有することに意味があった。枠組のないところで被災者同士が体験を語りあうのは難しい。圧倒的恐怖体験は、繰り返しそこに立ち戻ろうとする動きと、そこから逃れようとする動きの綱引きと強い葛藤をもたらすため、語ることに聞かせることにも躊躇が生じる。語ることが必ずしも良いわけではないが、語られて共有されると、解放が起こる。危機についてのナラティブを語ることで、秩序が生み出され、感情が込められ、意味づけの探求が可能になり、他者とつながることができる (Riessman, 2014)。

外部者との通りすがりの出会いのなかで吐露される物語もあった。取り返しのつかない喪失、ぶつけようのない怒り、罪と悔い。自分の属するコミュニティと無関係の外部者、二度と会うこともないであろう見知らぬ他者であるからこそ、匿名性のもとで吐き出されるものがある。聴きすぎてしまったのではないかと後で考え込んだこともあった。外部者が無遠慮に他者の内面に入り込んでよいわけではない。しかし、誰とも話さなければリスクはないが、出会いも始まらない。聴く側にもその責任を引き受ける主体的選択と覚悟がいる。

語らない人々も多くいる。初年度の沿岸部の風景

は、ひとたびそこに身を置けば、語らずとも推して知るべしだった。院生たちは、身体性、肌感覚、五感という言葉を用い、圧倒されながらも唯一無二の体験として心に刻んだ。それは言語化するのが難しく、私たちを無言にした。一緒に行動した者同士では了解可能であるが、その場に身を置いたことのない人には伝えようがないという思いもある。これこそ、被災体験者たちが抱く感覚なのかもしれない。

現地の人にとって、復興は、給食が再開した、祭りができるようになった、線路が復旧したなど、日常性を取り戻すことだった。日常は良いものからのみ成り立っているわけではない。同時に、自分たちの日常に埋め込まれ、それまで気づいていなかった先人の知恵を発見することでもあった。そこには外部者の視線が意味を持っていた。被災を契機に、民話や祭事に眼が向けられ、活動が活性化した。失ったもの、新たに加えられたものによって文化の革新が起こっていた。これは歴史を通じて繰り返されてきたことだった。復興は、過去を振り返り捉えなおすことをも含んでいる。

これに対して、原発事故については事故時の体験を聴くことは少なかったし、放射能の話題はタブーだと感じるが多かった。現地の人々にとって、外部者の侵入は、いかんともし難い現状に直面することを強いるものであり、葛藤と苛立ちを呼び起こすものだったのかもしれない。この構造自体が、原発事故非被災地の加害性を示していた。責任は全体にあるのに、そのつけは被災地に押しつけられている。繰り返し被災地に足を運び、状況を理解するようになると、外部者は徐々に中間地帯の人となって沈黙し始める。そんななかで復興をどのように語り得るのか。それでも人々は黙々と人生を営み続けるし、多様な形で復興の物語を描く果敢な人々はいらる。いまだ着地点が見えず、社会的事象によってその都度語り揺らぎざるを得ない状況にある人々、強制避難者、残留者、自主避難者、帰還者と立場の異なる人々が分断に抗う物語をどのように形作ることができるのか、外部者は耳を傾け、共に引き受けなければならぬ。

2) レジリエンスと外部からの支援

レジリエンスの源は、自分たちのことは自分たちでやるという主体的決意にあり、それゆえにこそ、外部からの支援に感謝し、そこからエネルギーを引き出すことができた。危機に際して、誰かが気にかけて、できることがあれば何かしたいと思っていることに気づくことは勇気を呼び起こす。他方で、外部者の語りには、現地の人々のパワーに力をもらったという表現がたびたび出てくる。物事がうまくいっている時、危機時の出会いはとりわけ相互をエンパワーするものなのだろう。

漫画展を使ったレジリエンスに関するアクションリサーチでは（村本・磯井・岩澤・川福・地下・前阪・清武・森・奥野・団・中村，2014），困難を乗り越える力は、①他者に頼りつながりを力にする ②覚悟を決めて自分の人生を引き受ける ③運命をありのままに受け入れる（人生観）から成立していた。この研究では、困難として個人的体験が想定されていたのに対し、共同体で抱える困難としての災害においても、主語を複数にしたところで同様のことが言えるようである。

外部からやってくるボランティアの迷惑にまつわる話も数々あった。その特徴はほとんど一貫しており、「被災者に弱者のレッテルをはり、自分たちが何とかしてやると自己満足のために来ている人」だった。被災地の人々に外部からの支援で役に立ったことは何かを問うと、しばしば「何をしてもらったということは関係ない。続けて来てくれることが一番ありがたい」との答えが返ってきた。外部者には“doing”ではなく“being”としての価値が求められており、双方が対等に立場の違うそれぞれの困難を引き受け、乗り越えることが求められている。

結局のところ、復興も支援も出会いと「物語る力」に収斂していく。被災の語り部や民話の会の活動に見られるような「物語る力」にレジリエンスがある。これは土地の伝統に根ざすものであるが、「物語る力」が発揮されるためには、「聴く力」が必要とされる。全国から駆け付けたボランティアや、東北に関心を持ち被災地へのツアーに参加する人々は、「聴く力」となり得る。そして、聴く人は物語る人となる。小野（2016）は、「語り手は聞き手によってよみが

えり、聞き手は語り手によってつくりかえられる」と言うが、出会いは変容をもたらし、そこからエネルギーが生まれる。語り手となった聴き手は、語り手と聴き手の間にはどこまでも交じり合えない溝を抱えていることに気づく。そしてそれを苦渋と無力感とともに引き受けるのである。

みやぎ民話の会とともに語りのアーカイブを作った清水（2016）は、そこから見出されたことを、①協働は互酬関係のなかで成り立つ。互酬とは、互いに敬意を表すことで成立する金銭を媒介にしない関係 ②ヴァナキュラーすなわち、その土地でつくられ、その土地で活かされるには旅人の眼が必要である ③言葉は発話者から離れ、別の人に定着する ④自分の狂気と向き合い、それを公的な場所に接続させることであると言い、野家（2016）は、自己物語は他者の物語と出会い、交錯し絡み合うことによって、一種の間主観的な物語を結晶させる。この間物語性（inter-narrativity）の次元に「歴史」というものが立ち上がるとしている。当事者も外部者も個を背負ってものがきながら、個を超え普遍的世界に連なる。

このプロジェクトを始める時、トラウマのトラウマたる所以は、恐怖に伴う圧倒的無力感と孤立無援感に由来する関係性の破壊にあり、回復は破壊されてしまったさまざまな関係性を紡ぎ直すことと置いた。（村本，2011; 2015）。レジリエンスは、それに抵抗し得る有力感と他者との絆による関係性の強化にある。語る、聴くという関係の繰り返しによって、歴史という時間軸に自らを位置づけ、それが語り継がれていくとすれば、未来の災禍に対するレジリエンスが形成されていくだろう。歴史のなかに循環する回路を見いだせない原発事故被害については、これを国家と資本の論理に基づいた中央集権的統治における公害事件と並べてみることで歴史に回帰させ、その構造を打破する脱服従化を目指すべきだとする佐藤・田口（2016）らの思想に今後のヒントがあるのかもしれない。

3) ショーストーリー分析を振り返って

今回のショートストーリーの書き手は一人であるが、被災地の人々が主人公となる物語の大半は、その

人自身が語った物語を書き手が語り直したものである。そういう意味で、本研究で示されたショートストーリーは幾重にも編集し直されている。出来事がある、その出来事が書き手との関係のなかで物語られ、記録されたものが、書き手の記憶によってピックアップされ一定の枠組みの中で編集し直された。ひとつの物語には、すでにたくさんの声が入っているのである。さらに、それらをどのように読んだかという読み手の編集が加わることだろう。こうして、被災と復興の物語は、共創される物語となる。

印象深いものとして思いつくものから書いていったために、全体を眺めてみると伝えるべきなのに今回、表現されなかったものが多くあることを感じる。もう100編書きたい。そのうえで、他のプロジェクトメンバーによるショートストーリーを加え、最終的には、現地の人々に読んでもらって、さらに声を加えることで、多声的な被災と復興の物語を描けたらとりあえず十年のミッションを完了することができるのではないだろうか。

おわりに

この原稿を書き上げる前日、No.34で復興を描いたY町を訪れていた。図書室で一人作業をしている男性と言葉を交わした。定年退職し、新築の家を建てて三ヶ月もたたないうちに、あの津波で家ごと妻を流され、教師になったばかりの一人息子も別の町の学校で犠牲になったという。ひとりぼっちになったので、毎日、図書館に来るのだそうだ。「みんな

もう忘れてしまっている」とつぶやいた言葉が胸に刺さった。その前日に原発被災地で頂いた本は『東日本大震災、復興の光と影』だった。どこまでいっても影がなくなることはない。耳を澄まし、記憶する努力を続けよう。

引用文献

- 川喜田二郎 (2003) 『続・発想法—KJ法の展開と応用』中公新書
- 村本邦子 (2011) 「東日本家族応援プロジェクトを立ち上げて」『コミュニティ心理学研究』15巻2号 55-65頁
- 村本邦子 (2015) 「臨地の対人援助学—『東日本・家族応援プロジェクト』から見る東日本大震災の復興の物語」村本邦子, 中村正, 荒木穂積 (『臨地の対人援助学』晃洋書房 1-8頁)
- 村本邦子・磯井知子・岩澤由真・川福理沙・地下昌里・前阪千賀子・清武愛流・森希理恵・奥野景子・団士郎・中村正 (2015) 「困難を乗り越える力—『未来のための思い出：ココロ重なるプロジェクト』で集まった声の分析から」対人援助学会第7回年次大会ポスター発表
- 野家啓一 (2016) 「『物語』を生きる」『せんだいメディアテーク (2016) 『物語のかたち』 7-12頁
- Riessman, C. K. (2014) 『人間科学のためのナラティブ研究法』大久保功子・宮坂道夫監訳, クオリティケア
- 小野和子 (2016) 「小野和子語録」『せんだいメディアテーク (2016) 『物語のかたち』 157頁 佐藤嘉幸・田口卓臣 (2016) 『脱原発の哲学』人文書院
- 清水チナツ (2016) 「影が照らす」『せんだいメディアテーク (2016) 『物語のかたち』 168-177頁

(2019. 12. 3 受理)

(ホームページ掲載 2020年4月)